

# の大地に賭ける。

何もかもが失われた場所で「いつの日かここに平穏な暮らしを」と願いながら被災者たちと共に過ごしている男がいる。今はまだ見えない復興という名のゴール、その果てしなき道のりを男は仲間たちと、再び歩き始めていた。

写真 大塚・写真・文



## 吉村誠司

**Profile** 昭和40年8月、三重県桑名生まれ。聖パウロ中華国際高等学校、日本ルーテル学院大学卒業。在学中に世界地図を各自車庫で一人旅をし、途中インドですべての荷物を持った。それをきっかけに入社が大きく変わる。91年に25歳で東京都府中市の議員に当選。95年の阪神淡路大震災発生後の4日目に現地入りし、兵庫県で支援活動を開始。その後、次期自治体選挙への予定馬を表明し、神戸元気で副代表として神戸暮らしを始め、被災者の被災地を回って24時間世界初の生活活動を行なう。その後、国内外の災害地への支援活動も行う。04年にはイラクの戦争に反対する声援でヒューマンシールド（人肉の盾）になるが、その経験が現在の活動の原体となる災害支援活動専門のNGOヒューマンシールド神戸を立ち上げる。07年に神戸が一役引けついでことから、拠点を長野県に移し、国内外の災害支援活動を行なっている。

震災の吉村の活動拠点となっている神戸市灘区の内ヶ島にて、震災にあってこの内ヶ島は唯一の幸下りしたという。津波の被害も甚大で、一瞬にして平穏な暮らしが破壊された。が、そのうち生き残った地になって希望を失わないままの人たちと一緒に、復興支援活動に参加している男もその一員に組み合っている。

# 悲しみ

## 俺たちの責務

3月11日、東日本大震災が発生したとき、吉村はたまたま実家のある東京都の国分寺に帰省をしていた。激しい揺れに吉村は「東海地震」と、とっさに思ったという。この数日前から東北で震度4クラスの地震が頻りに起きていたこともあり「そろそろ発生するのではないかと」意識をしていたからだ。が、すぐに震源は宮城県沖と判明。震度も、吉村は地震発生から1時間後には東北に向かつて出動していた。大地震などの大規模災害が発生した場合、災害地に急行し救済活動や被災者の支援、ときには消火活動を行なうのが、災害支援専門のNGOヒューマンシールド神戸の代表、吉村副司の仕事だ。

職業柄、常に災害への準備はしてあり、愛車の1ボックスカーのデリカにはチエーンソーや鉄を切るエンジンカッター、3日分の食料、寝袋などが一通り積んである。

混乱する都内の交通網を抜け、仲間たちと連絡を取り合いながら、被災地へと向う緊急車両の列に加わり、東北自動車道を北上した。吉村には95年に起きた阪神淡路大震災で得た苦い教訓があった。あのとき現地に入ったのは地震発生から4日目、もっと早く現場に入っていたら、救えた命がはいばいあったはず……。だから、1日でも早く被災地へ、という想いが今も強く心にある。

翌12日の午前2時、地震発生から2時間後に宮城県の石巻市内を通過すると、数キロと離れた石巻港（岩手県）の方角の空が炎で赤く染まっていた。さらに寄せられた情報では、約80キロと

北の気仙沼港と地蔵2こから出火し、住宅地に延焼し始めているという。消火活動に参加するべくそのまま北上し、明け方の気仙沼に入った。が、すでに薬火が町のほとんどを照やし、消防隊員ですら、そのすさまじい光景に愕然としていたという状況だった。

「でも火なんか消せる状態じゃなかったですね。消火も鎮外で、しかも、ものすごい臭いが出て、夜明けの気仙沼の町が焦臭くされてゆくあの光景は、忘れられない」

### 初動から72時間 言葉にならない現場の姿

その後、消火を断念し現地の消防団員とともに周囲のビルを取り残されていた人たちの救出に当たり、午後からはさらに約30人超れた若年層消防団員（団員）へ行くと、自衛隊、警察、消防と不慣れな状況になった道を拓き、行方不明者の捜索を開始した。陸前高田は町そのものが壊滅したと報道された場所だ。

「阪神淡路大震災で建物も倒壊した町を、そのままで巨大な土崩れが気に押し潰していったような光景、とても言葉ではいいのかわからない。とても言葉で表現できるものではない」

目の前には3、400人もの遺体が発見された現場があり、生き残った住民たちが泣きながら手作りで、身内の手がかりを探していた。

「あの悲惨さは、どんなメディアを駆使したとしても、伝えないだろうと思います」

また、津波から助かった人も、とてももなかつた。想いを壊いられていた、もしかしたら、家族や財産を失ったかもしないという不安、やつたり着いた避難所には、電気も食料も水さえもないのだ。

「阪神淡路大震災を皮切りに、中国沖地震、岩手宮城内陸地震といった国内の災害地はもとより、パキスタン、北朝鮮地震、中国四川省大地震、スマトラ島沖地震津波といった世界各地の災害地で活動をしていた男をもつて、想像を絶するほどの厳しい現場がそこにはあった」。

しかし、たとえ絶望的な状況であっても、吉村は生き残った人たちのために、翌日から支援活動に奔走する。各地から届く支援物資は、とても十分とはいえないが、とにかく被災者と届け、依頼があれば安否確認のとれない人の捜索、さらには車での救出までもして、ときには自分の車を被災者を岩手県の一関（陸前高田）にある温泉施設へ送迎したりした。また、場合によっては緊急を要する車両にガソリンを供給したり、とにかく広く被災地を北へ南へ、車で駆け回りながら走り続けたのだ。そして、個人名救助費優先の一週間は駆け回らされていった。

震災から一週間が過ぎ、石巻市でまたったNPOやNGOが集まって、ボランティアセンターの今後の活動方針を決



集めては捨てる、また集めては捨てる。この果てしない作業も必ずいつか終わりがくる。その日まで、神聖との地道な作業は続く



沿岸部のガレキ収集ではカヌーが機動力を発揮。全国から高村のカヌー仲間が集まり、コソコソと収集作業を繰り返している



ごっしりと山積みされたガレキたち。社団法人全体ではなく小割ヶ浜地区だけでこれだけある。しかもまだ増え続けている

## いつまでも、忘れることなく 心のスイッチをオンにし続けてほしい。

が石巻各地でスムーズに活動できる体制を整った。

そうしたボランティアを受け入れるようになり、吉村はさまざまな人が参加していることを知るようになる。なかには被災者が参加する場合もあるという。「ある男性は、石巻の海浜地区で大規模な建設中、そのまま津波で海に流されたそうです。転機こそ免れましたが、沈没の恐怖のなか、海に漂流している人たちにロープを投げ、救助し続け、で



社団法人の集落。行政もボランティアも疎視しているが、巨大すぎる被災地には、3ヶ月を過ぎてもこのように手付かず状態のところが多い数ある



高野さんたちがとても大事にしていた「真海楼」の像があった島も無残にガレキの山だったが、今ではこの通り。諦めていた神事を無事にやることもできた

「真セン」真ボランティアセンターの略）と呼んでいるんですが、仲間にはお箸を使うかのように重機を扱うも連中がいっぱいいいままから、クレーン車やダンプなどを持ってきて、手強い現場でも車を引く強り出してとこかしてしまっんです」

こうした活動は表面向きはボランティア

める会議が開かれた。この会議で吉村は神戸の例を挙げ、行政ができない部分、手が届かない部分をボランティアがフォローし、そのための連絡協議会を作ることを提案した。この提案は受け入れられ、石巻市を拠点に各団体がそこからボランティア活動を行なうことが決まった。石巻は被害こそ甚大だったが三陸地域などに比べると、津波から一週間がたち、水が引いた場所も多く、ボランティアが入ればなんとか回復できる場所もあった。

こうして震災から約10日後には、市内にある専修大学キャンパスにボランティアセンターの事務所をかまし、そこで全国から集まる各ボランティア団体を集めるという体制を整えた。いわば、ボランティアが行政をおして受け皿を築くのではなく、自分たちで受け皿を作り出したのである。この仕組みは吉村たちが12年間の神戸での被災者支援活動で学んだことだった。最初は小さな7団体くらいが集まったが、震災から90日ほどたった段階で、団体数は爆的に1000

も本人は「仮ししか救えなかった」と言うんです。どこかの家裏が屋根に乗ったまま沖へと流されていく姿とか、夜になり暗い海から湧き上がる、位置がわからず助けられなかった人とかたくさんいたそうです。まさに生き地獄を味わったわけですね。まさに人たちのために、これからは生かされた自分の命を被災された人たちのために使うと言つて、ボランティアに参加するようになったんだそうです」

ボランティアセンターには各現場からスタッフをそれぞれにさまざまな情報が入ってきた。なかには「支間に車が突っ込んで、おぼあちゃん（車）が突っ込んでいない」などと、現場に行ってみると、1軒に8台くらい車が突っ込んでいる家もあったという。こうした大層な作業もボランティアのできる範疇を越えているが、行政も地元の実業者も被災しているのに対して対応ができない。こうしたとき、吉村の昔からの仲間が駆けつけ、手伝って来てしまっという。

「真セン」真ボランティアセンターの略）と呼んでいるんですが、仲間にはお箸を使うかのように重機を扱うも連中がいっぱいいいままから、クレーン車やダンプなどを持ってきて、手強い現場でも車を引く強り出してとこかしてしまっんです」

こうした活動は表面向きはボランティア

「真セン」真ボランティアセンターの略）と呼んでいるんですが、仲間にはお箸を使うかのように重機を扱うも連中がいっぱいいいままから、クレーン車やダンプなどを持ってきて、手強い現場でも車を引く強り出してとこかしてしまっんです」

こうした活動は表面向きはボランティア

こうした活動は表面向きはボランティア

こうした活動は表面向きはボランティア



## 吉村誠司 地球ブログより

<https://willname.wordpress.com>



吉村さんのブログは、震災発生直後の混乱、立ち向かう人たちの姿、落ち着きを取り戻しつつある漁村の日常が綴られていて、ボランティアを考える上でも参考になるので、ぜひ見てほしい

も多く、そのままではかなり危険なので、全国から吉村の元へと駆けつけた仲間がみな自己責任のもと作業をしてしまうのだ。このように吉村の活動は実に多くの仲間を支えられている。ヒューマンリール神戸は、後方支援をするスタッフはいるものの、基本的に吉村が単独で行動しているNGOだ。が、一度助けがあったという間に多くの仲間が動き出す。神戸以来、10年以上も活動を共にしてきた仲間の一人はこう語る。

「とにかく吉村さんのネットワークの広さはハンパではありませぬ。今度も吉村

さんが困ったりして、何か声をかけたらすくてたくさんの人がそれについてくるんです。それも日本のみならず、台湾、中国、フランス、ノルウェーからも物資が届き、アメリカやオーストラリアからも人が駆けつけてくるので、まるでひとつの大きな団体のようになるんですよ」

### 被災地で被災者とボランティアと共に進む道

そんな仲間たちと吉村の、現在の主な活動拠点は、石巻と南三陸の間にある牡鹿半島(地図②)だ。地震の巨大な力はこの半島を東側に約50mもずらし、地面を1m以上も陥落させている。津波後には多くの方の遺体が浜辺に打ち上げられた。また半島という立地のために、他の地域に比べ1ヶ月もの間、災害支援の手が届かなかった場所でも、3ヶ月が過ぎた段階でもまだ、水道は復旧していない。

吉村はこの半島にある小割ヶ浜という漁港では毎日、ガレキ撤去の作業をしている。真つ面に目撃した船にガツツした体勢は、まさに現場の男といつた風貌で、地元漁師とすっぴん打ち解けている姿は、本物の漁師に見えなくもない。現在の主な作業は、漂着したガレキや流木、漁師が使った漁具などを回収するというもの。使った回収作業を行なう。こうした障や通防ではゴムボートよりも頑丈なカヌーが機動力を発揮するという。カヌーを扱う中心メンバーも吉村の古くからの仲間、気の通くような収集作業も、コンコ

ツとこなしている。この2ヶ月間、ひたすら知れなかったガレキをひとつひとつと、漁港にもすごい高さまで積みあげられていた。しかも、まだまだ先が見えないほどだ。だが、この2ヶ月の住居の暮らしが安定するまでは続けてゆくのだという。

吉村の活動は震災直後の救援活動という緊急性を帯びている場合もあるが、被災された方々が被災地で人生をやりなおせるまで見届けるというのが主な活動だ。だが、今度の震災では「震災の、かの手が、未だに見えてこない」とかなり長い期間が予想された。

そこで長い年月を乗り切るために、現地の若者たちやボランティアを支援するためのNGO「石巻ボランティア支援ベイス」(資料②)を仲間と立ち上げた。英訳とはカヌーレスキューのロープのことだという。ここでボランティア同士は連携を深め、長期にわたる復興支援活動を描いていく。こうした支援は神戸阪神淡路大震災では実に12

年の歳月を要することとなったが、おそらく今度の場合、震災の規模を考えるとそれ以上の時間がかかることは間違いないだろう。だが何年かあろうとも、やりぬく覚悟はできている。

そして、この長い道のりを進む上で吉村は、東北を応援している人たちに向けてこう語る。

「東北を支援してくれる方には、被災地への気持ちで10年間切らさず、そのスイッチを入れたままではほしいんです。たとえば寄付にしても1万円を一回だけで終わりにするのではなく、それならば1000円を10年に分けて寄付するよううな、ずっと被災地を思い続ける気持ちで見守ってほしいんです。この震災からの復興は、本道に何年かかかるかわからないというのが現状ですが、どうかこれからも心のスイッチを切らないでください」

日本がこれから歩くことになる道でもなく長い復興への道のりは、まだ始まったばかりだ。



Photo: 吉村誠司  
今回の震災ですら1年の3分の1を世界最中どころか災害地で過ごすという吉村。まさに現場の男だ。仲間からは「助さん」または「吉村君」の愛称を呼ばれ、時には「おじさん」と呼ばれる。笑顔で周囲の人々を和ませるところが、彼のすごいところと呼ばれる。長年の漁師には静かなる漁師の魂が、心優しいおじさんは子供たちの「今度いつ帰ってくるの」という声に、思わずおろおろと泣いてしまうことも度々

◆今こそ笑え! ◆健康講座「痛風」 ◆夢、あふれていた俺たちの時代「昭和46年編」

# 昭和46年男

明日への元氣と夢を満載!

定価680円 8月号 2011 August vol.8 www.s40otoko.com

Born in 1965

ファンタスティック8月号発行 2011年9月1日発行 第12巻第12号(読者数16万人)

どっさり笑おう、ガハハといこう!! 笑いは俺たちの得意技



巻頭特集

# 今こそ笑え!

## Keep on Smile



震災復興はまだ始まったばかり  
**俺たちの責務**

アイドルを追え!  
**相本久美子**

「昭和40年男のための健康講座」  
痛みより、近づいてくる死への恐怖  
**痛風注意報発令!!**



タメ年のスゴイやつ  
動物写真家  
**福田幸広**



ガツンとひと言、兄貴の説教  
漫画家 **ちばてつや**



夢、あふれていた俺たちの時代

連載特集

# 昭和46年



仮面ライダー1号2号・帰ってきたウルトラマン・駄菓子&駄玩具全盛期・アイドル時代の幕開け・クルマ・バイク...etc.